

## どんぐりと山猫

おかしなはがきが、ある土曜日 [どえうび] の夕 [ゆふ] がた、一郎 [いちろう] のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けつこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでください。

山ねこ 拝

こんなのです。字 [じ] はまるでへたで、墨 [すみ] もがさがさして指 [ゆび] につく

くらゐでした。けれども一郎 [いちらう] はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校 [がくかう] のかばんにしまつて、うちぢうとんだりはねたりしました。

ね床 [どこ] にもぐつてからも、山猫 [やまねこ] のにやあ [・・・] とした顔 [かほ] や、そのめんだうだといふ裁判 [さいばん] のけしきなどを考 [かんが] へて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎 [いちらう] が眼 [め] をさましたときは、もうすつかり明 [あか] るくなつてゐましたおもてにでてみると、まはりの山 [やま] は、みんなたつたいまできたばかりのやうにうるうるもりあがつて、まつ青 [さを] なそらのしたにならんでゐました。一郎 [いちらう] はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川 [たにがは] に沿 [そ] つたこみちを、かみの方 [はう] へのぼつて行きました。

すきとほつた風 [かぜ] がざあつと吹 [ふ] くと、栗 [くり] の木 [き] はばらばらと実 [み] をおとしました。一郎 [いちらう] は栗 [くり] の木 [き] をみあげて、

「栗 [くり] の木 [き]、栗 [くり] の木 [き]、やまねこがここを通 [とほ] らなかつたかい。」とききました。栗 [くり] の木 [き] はちよつとしづかになつて、「やまねこ

なら、けさはやく、馬車 [ばしや] でひがしの方 [ほう] へ飛 [と] んで行 [い] きましたよ。」と答 [こた] へました。

「東 [ひがし] ならぼくのいく方 [ほう] だねえ、おかしいな、とにかくもつといつてみやう。栗 [くり] の木 [き] ありがたう。」

栗 [くり] の木 [き] はだまつてまた実 [み] をばらばらとおとしました。

一郎 [いちろう] がすこし行きますと、そこはもう笛 [ふえ] ふきの滝 [たき] でした。笛 [ふえ] ふきの滝 [たき] といふのは、まつ白 [しろ] な岩 [いは] の崖 [がけ] のなかほどに、小 [ちい] さな穴 [あな] があいてゐて、そこから水 [みづ] が笛 [ふえ] のやうに鳴 [な] つて飛 [と] び出 [だ] し、すぐ滝 [たき] になつて、ごうごう谷 [たに] におちてゐるのをいふのでした。

一郎 [いちろう] は滝 [たき] に向 [む] いて叫 [さけ] びました。

「おいおい、笛 [ふえ] ふき、やまねこがここを通 [とほ] らなかつたかい。」滝 [たき] がぴーぴー答 [こた] へました。

「やまねこは、さつき、馬車 [ばしや] で西 [にし] の方 [ほう] へ飛 [と] んで行 [い] きましたよ。」

「おかしいな、西〔にし〕ならぼくのうちの方〔ほう〕だ。けれども、まあも少〔すこ〕し行〔い〕つてみやうふえふき、ありがたう。」

滝〔たき〕はまたもとのやうに笛〔ふえ〕を吹〔ふ〕きつゞけました。

一郎〔いちろう〕がすこし行〔い〕きますと、一本〔ぽん〕のぶなの木〔き〕のしたに、たくさんの白〔しろ〕いきのこが、どつてこどつてこどつてこと、変〔へん〕な楽隊〔がくたい〕をやつてゐました。

一郎〔いちろう〕はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、こゝを通〔とほ〕らなかつたかい。」

とききました。するときのこは

「やまねこなら、けさはやく、馬車〔ばしや〕で南〔みなみ〕の方〔ほう〕へ飛〔と〕んで行〔い〕きましたよ。」とこたへました。一郎〔いちろう〕は首〔くび〕をひねりました。

「みなみならあつちの山〔やま〕のなかだ。おかしいな。まあもすこし行〔い〕つてみやう。きのこ、ありがたう。」

きのこはみんないそがしきうに、どつてこどつてこと、あのへんな楽隊〔がくたい〕を

つづけました。

一郎 [いちろう] はまたすこし行 [い] きました。すると一本 [ほん] のくるみの木 [き] の梢 [こずゑ] を、栗鼠 [りす] がぴよんととんでゐました。一郎 [いちろう] はすぐ手 [て] まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通 [とほ] らなかつたかい。」とたづねました。するとりすは、木 [き] の上 [うへ] から、額 [ひたひ] に手 [て] をかざして、一郎 [いちろう] を見 [み] ながらこたへました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車 [ばしや] でみなみの方 [ほう] へ飛 [と] んで行 [い] きましたよ。」

「みなみへ行つたなんて、二 [ふた] とこでそんなことを言 [い] ふのはおかしいなあ。けれどもまあもすこし行つてみやう。りす、ありがたう。」りすはもう居 [ゐ] ませんでした。たゞくるみのいちばん上 [うへ] の枝 [えだ] がゆれ、となりのぶなの葉 [は] がちらつとひかつただけでした。

一郎 [いちろう] がすこし行 [い] きましたら、谷川 [たにがは] にそつたみちは、もう細 [ほそ] くなつて消 [き] えてしまひました。そして谷川 [たにがは] の南 [みなみ]

の、まつ黒〔くろ〕な樫〔かや〕の木〔き〕の森〔もり〕の方〔ほう〕へ、あたらしいちいさなみちがついてゐました。一郎〔いちろう〕はそのみちをのぼつて行きました。樫〔かや〕の枝〔えだ〕はまつくろに重〔かさ〕なりあつて、青〔あを〕ぞらは一〔ひと〕きれも見〔み〕えず、みちは大〔たい〕へん急〔きう〕な坂〔さか〕になりました。一郎〔いちろう〕が顔〔かほ〕をまつかにして、汗〔あせ〕をぽとぽとおとしながら、その坂〔さか〕をのぼりますと、にはかにぱつと明〔あか〕るくなつて、眼〔め〕がちくつとしました。そこはうつくしい黄金〔きん〕いろの草地〔くさち〕で、草〔くさ〕は風〔かぜ〕にざわざわ鳴〔な〕り、まはりは立派〔りつぱ〕なオリーブいろのかやの木〔き〕のもりでかこまれてありました。

その草地〔くさち〕のまん中〔なか〕に、せいの低〔ひく〕いおかしな形〔かたち〕の男〔をとこ〕が、膝〔ひざ〕を曲〔ま〕げて手〔て〕に革鞭〔かわむち〕をもつて、だまつてこつちをみてゐたのです。

一郎〔いちろう〕はだんだんそばへ行〔い〕つて、びつくりして立〔た〕ちどまつてしまひました。その男〔をとこ〕は、片眼〔かため〕で、見〔み〕えない方〔ほう〕の眼〔め〕は、白〔しろ〕くびくびくうごき、上着〔うはぎ〕のやうな半天〔はんてん〕のやうなへ

んなものを着 [き] て、だいいち足 [あし] が、ひどくまがつて山羊 [やぎ] のやう、ことにそのあしきときたら、ごはんをもるへらのかたちだつたのです。一郎 [いちろう] は気味 [きみ] が悪 [わる] かつたのですが、なるべく落 [お] ちついてたづねました。

「あなたは山猫 [やまねこ] をしりませんか。」

するとその男 [をとこ] は、横眼 [よこめ] で一郎 [いちろう] の顔 [かほ] を見 [み] て、口 [くち] をまげてにやつとわらつて言 [い] ひました。

「山 [やま] ねこさまはいますぐに、こゝに戻 [もど] ってお出 [で] やるよ。おまへは一郎 [いちろう] さんだな。」

一郎 [いちろう] はぎよつとして、一 [ひと] あしうしろにさがつて、

「え、ぼく一郎 [いちろう] です。けれども、どうしてそれを知 [し] ってますか。」と言ひましたするとその奇体 [きたい] な男 [をとこ] はいよ  
いよにやにやしてしまひました。

「そんだったら、はがき見 [み] だべ。」

「見 [み] ました。それで来 [き] たんです。」

「あのぶんしやうは、ずるぶん下手 [へた] だべ。」と男 [をとこ] は下 [した] をむい

てかなしさうに言 [い] ひました。一郎 [いちろう] はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしやうがうまいやうでしたよ。」

と言ひますと、男 [をとこ] はよろこんで、息 [いき] をはあはあして、耳 [みゝ] のあたりまでまつ赤 [か] になり、きものゝえりをひろげて、風 [かぜ] をからだに入 [い] れながら、

「あの字 [じ] もなかなかうまいか。」ときゝました。一郎 [いちろう] は、おもはず笑 [わら] ひだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生 [ごねんせい] だつてあのくらゐには書 [か] けないでせう。」

すると男 [をとこ] は、急 [きう] にまたいやな顔 [かほ] をしました。

「五年生 [ごねんせい] つていふのは、尋常五年生 [じんじやうごねんせい] だべ。」その声 [こゑ] が、あんまり力 [ちから] なくあはれに聞 [きこ] えましたので、一郎 [いちろう] はあわてゝ言 [い] ひました。

「いゝえ、大学校 [だいがくかう] の五年生 [ねんせい] ですよ。」

すると、男 [をとこ] はまたよろこんで、まるで、顔 [かほ] ぢう口 [くち] のやうにして、にたにたにたにたにた笑 [わら] つて叫 [さけ] びました。



「あののがきはわしが書 [か] いたのだよ。」 一郎 [いちろう] はおかしいのをこらえて、  
「ぜんたいあなたはなにですか。」 とたづねますと、男 [をとこ] は急 [きふ] にまじめ  
になつて、

「わしは山 [やま] ねこさまの馬車別当 [ばしやべつたう] だよ。」 と言 [い] ひました。

そのとき、風 [かぜ] がどうと吹 [ふ] いてきて、草 [くさ] はいちめん波 [なみ] だ  
ち、別当 [べつたう] は、急 [きふ] にていねいなおぢぎをしました。

一郎 [いちろう] はおかしいとおもつて、ふりかへつて見 [み] ますと、そこに山猫 [や  
まねこ] が、黄 [き] いろな陣羽織 [じんばをり] のやうなものを着 [き] て、緑 [みど  
り] いろの眼 [め] をまん円 [まる] にして立 [た] っつてゐました。やつぱり山猫 [やま  
ねこ] の耳 [みみ] は、立 [た] っつて尖 [とが] っつてゐるなど、一郎 [いちろう] がおも  
ひましたら、山 [やま] ねこはぴよこつとおぢぎをしました。一郎 [いちろう] もていね  
いに挨拶 [あいさつ] しました。

「いや、こんにちは、きのふははがきをありがたう。」

山猫 [やまねこ] はひげをぴんとひつぱつて、腹 [はら] をつき出 [だ] して言 [い]  
ひました。

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおとゝひから、めんだうなあらそひがおこつて、ちよつと裁判 [さいばん] にこまりましたので、あなたのお考 [かんが] へを、うかがひたいとおもひましたのです。まあ、ゆつくり、おやすみください。ちき、どんぐりどもがまゐりませう。どうもまい年 [とし]、この裁判 [さいばん] でくるしみます。」山 [やま] ねこは、ふところから、巻煙草 [まきばこ] の箱 [はこ] を出だして、じぶんが一本 [いつぽん] くわい、

「いかゞですか。」と一郎 [いちろう] に出 [だ] しました。一郎 [いちろう] はびつくりして、

「いゝえ。」と言ひましたら、山 [やま] ねこはおほやうにわらつて、

「ふゝん、まだお若 [わか] いから、」と言ひながら、マッチをしゅつと擦 [す] つて、わざと顔 [かほ] をしかめて、青 [あを] いけもりをふうと吐 [は] きました。山 [やま] ねこの馬車別当 [ばしやべつう] は、気 [き] を付 [つ] けの姿勢 [しせい] で、しやんと立 [た] つてゐましたが、いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえてゐるらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎 [いちろう] は、足 [あし] もとでパチパチ塩 [しほ] のはぜるやうな、

音 [おと] をきゝました。びつくりして屈 [かゞ] んで見 [み] ますと、草 [くさ] のなかに、あつちにもこつちにも、黄金 [きん] いろの円 [まる] いものが、ぴかぴかひかつてゐるのです。よくみると、みんなそれは赤 [あか] いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数 [かず] ときたら、三百 [びやく] でも利 [き] かないやうでした。わあわあわあわあ、みんななにか云 [い] つてゐるのです。

「あ、来 [き] たな。蟻 [あり] のやうにやつてくる。おい、さあ、早 [はや] くベルを鳴 [な] らせ。今日 [けふ] はそこが日当 [ひあた] りがいゝから、そこのとこの草 [くさ] を刈 [か] れ。やまねこは巻 [まき] たばこを投 [な] げすてゝ、大 [おほ] いそぎで馬車別当 [ばしやべつたう] にいひつけました。馬車別当 [ばしやべつたう] もたいへんあわてゝ、腰 [こし] から大 [おほ] きな鎌 [かま] をとりだして、ぎつくぎつくと、やまねこの前 [まへ] のとこの草 [くさ] を刈 [か] りました。そこへ四方 [しほう] の草 [くさ] のなかゝら、どんぐりどもが、ぎらぎらひかつて、飛 [と] び出 [だ] して、わあわあわあわあ言ひました。

馬車別当 [ばしやべつたう] が、こんどは鈴 [すゞ] をがらんがらんがらんがらんと振 [ふ] りました。音 [おと] はかやの森 [もり] に、がらんがらんがらんがらんとひゞき、

黄金 [きん] のどんぐりどもは、すこししづかになりました。見 [み] ると山 [やま] ねこは、もういつか、黒 [くろ] い長 [なが] い縺子 [しゆす] の服 [ふく] を着 [き] て、勿体 [もつたい] らしく、どんぐりどもの前 [まへ] にすわつてゐました。まるで奈良 [なら] のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵 [ゑ] のやうだと一郎 [いちろう] はおもひました。別当 [べつたう] がこんどは、革鞭 [かはむち] を二三べん、ひゆうぱちつ、ひゆう、ぱちつと鳴 [な] らしました。

空 [そら] が青 [あを] くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判 [さいばん] ももう今日 [けふ] で三日目 [みつかめ] だぞ、いゝ加減 [かげん] になかなかほりをしたらどうだ。」山 [やま] ねこが、すこし心配 [しんぱい] さうに、それでもむりに威張 [ゐば] つて言 [い] ひますと、どんぐりどもは口々 [くちぐち] に叫 [さけ] びました。

「いえいえ、だめです、なんといつたつて頭 [あたま] のとがつてるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがつてゐます。」

「いゝえ、ちがひます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大 [おほ] きなことだよ。大 [おほ] きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちば

ん大 [おほ] きいからわたしがえらいんだよ。」

「さうでないよ。わたしのはうがよほど大 [おほ] きいと、きのふも判事 [はんじ] さん  
がおつしやつたぢやないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高 [たか] いのだよ。せいの高 [たか] いことなんだよ。」

「押 [お] しつこのえらいひとだよ。押 [お] しつこをしてきめるんだよ。」もうみんな、  
がやがやがやがや言 [い] つて、なにがなんだか、まるで蜂 [はち] の巣 [す] をつゝつ  
いたやうで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫 [さけ] びました。

「やかましい。こゝをなんどこゝろえる。しづまれ、しづまれ。」

別当 [べつたう] がむちをひゆうばちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとし  
づまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねつて言ひました。

「裁判 [さいばん] ももうけふで三日日 [みつか] だぞ。いゝ加減 [かげん] に仲 [なか]  
なほりしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云ひました。

「いえいえ、だめです。なんといつたつて、頭 [あたま] のとがつてゐるのがいちばんえ  
らいのです。」

「いゝえ、ちがひます。まるいのがえらいのです。」

「さうでないよ。大 [おほ] きなことだよ。」がやがやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫 [やまねこ] が叫 [さけ] びました。

「だまれ、やかましい。こゝをなんと心得 [こゝろえ] る。しづまれしづまれ。」別当 [べつたう] が、むちをひゆうばちつと鳴 [な] らしました。山猫 [やまねこ] がひげをぴんとひねつて言ひました。

「裁判 [さいばん] ももうけふで三日目 [みつかめ] だぞ。いゝ加減 [かん] になかなほりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのとがつたものが……。」がやがやがやがや。

山 [やま] ねこが叫 [さけ] びました。

「やかましい。こゝをなんどこゝろえる。しづまれ、しづまれ。」別当 [べつたう] が、むちをひゆうばちつと鳴 [な] らし、どんぐりはみんなしづまりました。山猫 [やまねこ] が一郎 [いちらう] にそつと申 [まを] しました。

「このとほりです。どうしたらいゝでせう。」一郎 [いちらう] はわらつてこたへました。

「そんなら、かう言 [い] ひわたしたらいゝでせう。このなかでいちばんばかで、めちや

くちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教 [せつけう] できいたんです。」山猫 [やまねこ] はなるほどといふふうになつて、それからいかにも気取 [きど] つて、繻子 [しゆす] のきものゝ胸 [えり] を開 [ひら] いて、黄 [き] いろの陣羽織 [じんばをり] をちよつと出 [だ] してどんりどもに申 [まう] しわたしました。

「よろしい。しづかにしろ。申 [まう] しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつてゐなくて、あたまのつぶれたやうなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまひました。それはそれはしいんとして、堅 [かた] まつてしまひました。

そこで山猫 [やまねこ] は、黒 [くろ] い繻子 [しゆす] の服 [ふく] をぬいで、額 [ひたい] の汗 [あせ] をぬぐひながら、一郎 [いちろう] の手 [て] をとりました。別当 [べつたう] も大 [おほ] よろこびで、五六ぺん、鞭 [むち] をひゆうぱちつ、ひゆうぱちつ、ひゆうひゆうぱちつと鳴 [な] らしました。やまねこが言 [い] ひました。

「どうもありがたうございました。これほどのひどい裁判 [さいばん] を、まるで一分半

「ぶんはん」でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所〔さいばんじよ〕の、名誉判事〔めいよはんじ〕になつてください。これからも、葉書〔はがき〕が行〔い〕つたら、どうか来〔き〕てくださいませんか。そのたびにお礼〔れい〕はいたします。」

「承知〔しょうち〕しました。お礼〔れい〕なんかありませんよ。」

「いゝえ、お礼〔れい〕はどうかとつてください。わたしのじんかくにかゝはりますから。そしてこれからは、葉書〔はがき〕にかねた一郎〔いちろう〕どのと書〔か〕いて、こちらを裁判所〔さいばんじよ〕としますが、ようございますか。」

一郎〔いちろう〕が「えゝ、かまひません。」と申〔まう〕しますと、やまねこはまだなにか言〔い〕ひたさうに、しばらくひげをひねつて、眼〔め〕をぱちぱちさせてゐましたが、たうたう決心〔けつしん〕したらしく言〔い〕ひ出〔だ〕しました。

「それから、はがきの文句〔もんく〕ですが、これからは、用事〔ようじ〕これありに付〔つ〕き、明日出頭〔めうにちしゆつとう〕すべしと書〔か〕いてどうでせう。」

一郎〔いちろう〕はわらつて言〔い〕ひました。

「さあ、なんだか変〔へん〕ですね。そいつだけはやめた方〔ほう〕がいゝでせう。」



山猫 [やまねこ] は、どうも言 [い] ひやうがまづかつた、いかにも残念 [ざんねん] だといふふうにしばらくひげをひねつたまゝ、下 [した] を向 [む] いてゐましたが、やつとあきらめて言 [い] ひました。

「それでは、文句 [もんく] はいまゝでのとほりにしませう。

そこで今日 [けふ] のお礼 [れい] ですが、あなたは黄金 [きん] のどんぐり一升 [しやう] と、塩鮭 [しほざけ] のあたまと、どつちをおすきですか。」

「黄金 [きん] のどんぐりがすきです。」

山猫 [やまねこ] は、鮭 [しやけ] の頭 [あたま] でなくて、まあよかつたといふやうに、口早 [くちばや] に馬車別当 [ばしやべつたう] に云 [い] ひました。

「どんぐりを一升 [しやう] 早 [はや] くもつてこい。一升 [しやう] にたりなかつたら、めつきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」

別当 [べつたう] は、さつきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫 [さけ] びました。

「ちやうど一升 [しやう] あります。」山 [やま] ねこの陣羽織 [じんばをり] が風 [かぜ] にばたばた鳴 [な] りました。そこで山 [やま] ねこは、大 [おほ] きく延 [の] びあがつて、めをつぶつて、半分 [はんぶん] あくびをしながら言ひました。

「よし、はやく馬車 [ばしや] のしたくをしろ。」白 [しろ] い大 [おほ] きなきのこでこしらえた馬車 [ばしや] が、ひつぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形 [かたち] の馬 [うま] がついてゐます。

「さあ、おうちへお送 [おく] りいたしませう。」山猫 [やまねこ] が言 [い] ひました。二人 [ふたり] は馬車 [ばしや] にのり別当 [べつたう] は、どんぐりのますを馬車 [ばしや] のなかに入 [い] れました。

ひゆう、ぱちつ。

馬車 [ばしや] は草地 [くさち] をはなれました。木 [き] や藪 [やぶ] がけむりのやうにぐらぐらゆれました。一郎 [いちらう] は黄金 [きん] のどんぐりを見 [み]、やまねこはとぼけたかほつきで、遠 [とほ] くをみてゐました。

馬車 [ばしや] が進 [すす] むにしたがつて、どんぐりはだんだん光 [ひかり] がうすくなつて、まもなく馬車 [ばしや] がとまつたときは、あたりまへの茶 [ちや] いろのどんぐりに変 [かは] つてゐました。そして、山 [やま] ねこの黄 [き] いろな陣羽織 [じんばをり] も、別当 [べつたう] も、きのこの馬車 [ばしや] も、一度 [ど] に見 [み] えなくなつて、一郎 [いちらう] はじぶんのうちの前 [まへ] に、どんぐりを入れたます

を持 [も] つて立 [た] つてゐました。

それからあと、山 [やま] ねこ拝 [はい] といふはがきは、もうきませんでした。やつぱり、出頭 [しゅつとう] すべしと書 [か] いてもいゝと言 [い] へばよかつたと、一郎 [いちろう] はときどき思 [おも] ふのです。

■このファイルについて

標題：どんぐりと山猫

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行  
(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：2005年9月13日